

ハンガリーにおける日本語教育史概観

大杉 千恵子*

Historical Development of Japanese Language Education in Hungary: A Review Essay

Chieko OSUGI*

Abstract

JOCV (Japan Overseas Cooperation Volunteers) are Japanese skilled young people who work abroad for assisting the people of the recipient countries. Dispatching the JOCV is one of the responsibilities of JICA (Japan International Cooperation Agency) that is the main organization implementing Japan's ODA (Official Development Assistance)

The recent growth and development of Japanese language education in Hungary have been remarkable. At this time it is worthwhile to examine the history of Japanese language education in Hungary and consider its present situation. In my observation, the historical development of the Japanese language education can be divided into three phases: I. Introduction, II. Early development, and III. Maturity.

The period of introduction is from the 1920s to the late 1980s that is slightly before the termination of the Soviet influence. Interests in 'exotic' Japan was one of the critical triggers for Japanese language learning in this period. During this time some of the people who later developed Japanese language education in Hungary appeared on the scene.

After the compulsory study of Russian ended, Japanese language became popular among other foreign languages. During this period of early development (late 1980s-2000) many JOCV Japanese teachers came and the number of Japanese learners increased a great deal. Not only the numbers, but also the area of Japanese language education expanded to local cities. Japan's ODA played a very important role in this large growth.

Since the year 2001, the Japanese language education in Hungary entered a new mature phase. The establishment of the Hungarian Association of Japanese Teachers symbolizes the beginning of this new era. The number of Japanese language learners seems to have stabilized, and the Association is working on improvement of education quality.

The JOCV Japanese teachers played an epoch-making role to develop the foundation of the Japanese education in Hungary. Hopefully the Japanese language education will contribute to multilingualism that is the key to harmonious co-existence of peoples.

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程

はじめに

国際交流基金が四年毎に実施している最新の統計（2000）によると、海外の日本語学習者数がこの20年間に16倍以上に増加し、1998年の時点で210万人以上が世界のいたるところで日本語を勉強している。ハンガリー-日本語教育の歴史を振り返ってみると、飛躍的に大きな発展が見られるのは1990年代である。それは東西冷戦が終末を告げるとともに、中東欧がソ連の影響下から解放され、それにともない西側諸国の援助がハンガリーに投入され始めた時期に重なる。日本のODA（政府開発援助）も開始され、その先鞭をつけるべく青年海外協力隊の派遣が始まった。ハンガリーにおける日本語教育の史的展開の中で、ハンガリーに派遣された青年海外協力隊日本語教師の活動に注目しつつ、ハンガリーにおける日本語教育の歴史を概観したい。

本稿では、ハンガリーにおける日本語教育の史的展開を以下の三つの時期に分けて検討してみたい。まず20世紀初期の日本語教育の開始から体制転換前の1980年半ばまでの期間を第一期とし、続く1980年半ばから2000年までを第二期、そして2001年以降を第三期として見ていく。

1920年代から1980年半ばまでの60年に及ぶ長い期間を第一期として一つにまとめてしまうのは長すぎる観もある。しかしこの時期は日本語教育の芽が一旦、芽吹いたものの、戦争や社会主義という日本語を含む外国語教育に不遇な社会環境において、健全な成長が阻まれ速やかに次の段階へと成長できなかった時期と捉え、一まとめとしてみて良いと考える。第二期はそれまで

と打って変わって大きな発展が見られた時期である。この大きな発展はハンガリー-日本語教育界の内的要因からではなく、むしろ外的条件によってもたらされた。第一に政治的変動による社会環境の変化、教育制度の変革、そして社会主義時代には閉鎖されていた国が開かれ、東欧への日本の国際協力が開始されたということである。続く第三期は、1990年代に力をつけたハンガリー-日本語教育界が自らの内なるエネルギーで導き出した新しい時代である。ハンガリーに派遣された青年海外協力隊日本語教師の現在までの活動に注目し、評価を試みると同時に学校教育における日本語の位置づけおよび学習動機等の現状も探る。

筆者が初めてハンガリーを訪れたのは1993年夏、二ヶ月の滞在¹⁾であった。その後も語学学習等のため数週間の滞在を繰り返した。そして、1997年1月より1999年12月までの三年間は、ブダペストに勤務し、ハンガリーにおける協力隊日本語隊員の活動に触れる機会を得た。自ら、協力隊日本語教師としての経験をもつ筆者は、2000年4月からハンガリーにおける日本語教育を研究対象として調査を始めた。日本語関係者を訪れ、話を聞き、ハンガリー各地の日本語教育の現場で、授業観察やインタビューを行なった。本稿はその活動成果の一部である。

I．第一期（1920年代から1980年半ば）

- 1 ツラン運動

ハンガリーと日本の文化交流を研究した近藤（1999）は、ハンガリーにおける日本への関心は19世紀の終わり頃から見られると指摘している。そして、20世紀初頭に起

きた日露戦争で日本がヨーロッパの大国、ロシアに対し勝利をおさめた出来事はハンガリーにおいても、より一層日本への関心を深める引き金となった。ハンガリーにおける日本語教育の歴史はYamaji (1996: 8)によると1923年に始まる。第一次世界大戦終結後、そして第二次世界大戦勃発前のいわゆる戦間期における出来事である。ハンガリーの由緒あるエオトヴェシ・ローランド大学 (Eotvos Lorand Tudományegyetem略してELTE大学²⁾)において、ハンガリーの著名なトルコ学、言語学者プルーレ・ヴィルモッシュ (Prohle Vilmos)³が東アジア言語・文学科長となったのがきっかけで初めて日本語が教えられ始めた。

その時代背景として、1920年代から1940年代に興隆を極めたツラン運動がその当時の日本語教育に少なからぬ影響を与えている。「ツラン運動」(Turánizmus Mozgás)とはハンガリーの近代を専門とする歴史学者、戸谷(1991: 39)によれば、「日本とハンガリーを結ぶ重要なつながりをなすものでインド・ヨーロッパ語族に含まれない、日本人、フィンランド人、ハンガリー人、トルコ人などのユーラシア大陸に居住する諸民族の連帯を呼びかけた思想・文化運動」である。日本では限定的に一部の層の支持を得たに過ぎないが、ハンガリーにおける日本語教育の歴史を振り返る際には、避けては通れない歴史の出来事である。なぜなら、ツラン運動によって、ハンガリーと日本は親戚関係にあると教えられた人たちは、当時ロシアにも勝る強さを誇った日本を狂信的に崇拜し、それが日本語学習熱ともなったからである⁴⁾。

- 2 今岡十一郎 (1888 - 1973)

今岡は明治20年(1888年)島根県、松江市に生まれ、大正3年(1914)東京外国語学校(現在の東京外国語大学)ドイツ語科を卒業した。同年、来日していたハンガリーの民俗学者バラートシ・バローグ・ベネディク (Baratosi Balogh Benedik)のアイヌ、ギリヤーク、オロック研究旅行で北海道・樺太に同行し、これが縁で、バラートシから日本におけるツラン運動普及への協力を求められる。1921年再来日したバラートシの通訳、翻訳者として協力した後に今岡はハンガリーへ渡った。1922年から1931年までの10年近くハンガリーに滞在し、精力的にハンガリーのことを学び、また活動的に日本の紹介に努めた。ハンガリーの歴史研究家Umemura (1999)によると、日本人としてハンガリーで初めて日本についての講義をしたのは今岡であった。また、ELTE大学で1923年から日本語教育が始まったのは、この今岡の日本語の講義がきっかけであった。

日本に帰国した今岡は「ツラン運動」をハンガリー人と日本人の同族間における啓蒙的文化的運動として日本に紹介した。また、ハンガリー語学習が困難なのはその入門書と辞書がないからだと判断し、1942年にハンガリー語の入門書『ハンガリー語4週間』を刊行し、辞書の編纂にも着手した。辞書編纂は結果的に今岡のライフワークとなり、没年の1973年に刊行された。そしてこの『ハンガリー語辞典』の改訂新版が今岡の長女の尽力により2001年に出版された。巻末にある今岡の文中に次の記事が紹介されている。1931年、夏、今岡の帰国にあた

って書かれた、ハンガリーの新聞「ブダペスト・ジャーナル（仮訳）」(Pesti Naplo)の論説委員サボー・ラスロー(Szabo Laszlo)によるものである。「我々は今岡により多くのことを学んだ。日本の古い文化について、また新しいことも。又一千年前の女流作家、紫式部の長編小説『源氏物語』についても聞いた。願わくばその帰国後は我々の敬愛する日本国民にはるか西方の、中欧の景勝地、ドナウ盆地において文化の高い異民族と厳しい生存闘争のさなかにも、日本を慕うマジャール民族のいることを伝えてほしい。」(今岡2001:1134)

この後の日本人は留学生としてパズマーニ・ペーテル大学(現ELTE大学)へ留学した徳永康元⁵⁾になる。徳永は1938年に締結された日八文化協定の結果、派遣される事となった最初のそしてたった一人の留学生だった。当時ハンガリー語及びハンガリー文学を専攻していた学生は徳永しかいなかったからだと言う。留学生という身分ではあるが、ハンガリー語を専攻する言語学の学生であり、また他に日本語を教えらる日本人がいなかったということで、徳永が大学の正式の講師として日本語を教えた。現地人としてはこの当時既にマヨール・ジュラ(Major Gyula)が日本語を教えていた。徳永の記憶によるとマヨールの教えていた日本語は「ござります」調の大時代な、古風なものだったという。初めて日本を訪れたのは戦後になってからだったというマヨールは当時、彼がパリ滞在中に古い本で学んだ日本語を教えていたようだ⁶⁾。

1942年第二次世界大戦の戦火が広がり徳永は講義を中断し、帰国を余儀なくされた。そしてハンガリーは枢軸側として日本と共

に戦うが敗戦となる。そしてその後の、マヨール・ジュラの貢献は大きい。TIT市民講座(Tudományos Ismeretterjeszto Tarsulat)で日本語クラスを再開し、最初の日本語教科書を作成した(Sato:1996)。また市民講座に関してはハンガリーにおける日本研究について発表したハンガリー、セグド大学の法律学者、ハイドゥー・ヨーゼフ(Hajdu Jozsef)が次のように述べている。第二次世界大戦後、中断されていた日本語教育は「言葉だけではなく、日本文化も熱心に教えたマヨール・ジュラによる市民講座が日本語教育の新しい時代を開いた。」(1997:9)。戦後、ハンガリーはソビエトの傘下に組み入れられ社会主義国となったが、ソビエトの強圧に反発し、1956年にはハンガリー動乱が起こった。このハンガリー動乱の2年後、現在も日本で教育者として積極的に活動し、コダーイ芸術教育研究所の主宰者でもある羽仁協子が日本語教師としてELTE大学に迎えられた。徳永の帰国16年後のことである。

- 3 羽仁協子(1929 -)

現在、羽仁は自ら設立に尽力した、不登校児のための学校、愛知県黄柳野高校の理事長を務めている。このセクションは黄柳野高校での面談にて得た情報と著書『遠くから来た鏡』の内容などを対照してまとめたものである。当時の時代背景を知る上にも貴重と考えるので、簡単な生い立ちとともに、羽仁がハンガリーの日本語教育にどのように関わっていったかを見る。

歴史学者羽仁二郎を父に、評論家羽仁説子を母に1929年、東京に生まれた羽仁協子は祖父母にあたる羽仁吉一、もと子創設の

自由学園を卒業後、斎藤秀雄に師事し音楽の指揮法を勉強した。そして学びながら1947年から、ヨーロッパへ出発する1953年まで自由学園で音楽を教えていた。ハンガリーを代表する音楽家の一人コダーイ・ゾルタン（Kodaly Zoltan）と親交のあった父、羽仁五郎の勧めもあり、ハンガリーで音楽を勉強する事を考えるようになった。日本から外国へ音楽の勉強に行く音楽留学生たちがそろそろ出始めた頃である⁷⁾。祖父の羽仁吉一からの奨学金により、羽仁協子は24歳にして単身、1953年にヨーロッパへ渡った。しかし当時社会主義国のハンガリーへの入国は容易ではなかった。まずは隣国オーストリアのウィーンへ入り1年を過ごしたが、ハンガリー入国の目処は立ちそうにもない。長期戦を見込んでウィーンほど生活費がかからない東ドイツへ行く事にした。東ドイツへはベルリンを抜けて入る事ができた。そして、ライプツィヒの音楽学校の指揮科で勉強をしながらハンガリー入国の許可を待つ事にした。

日本語教師としてなら、ということでもうやくハンガリーへ入いたのは1958年、ライプツィヒの音楽学校指揮科を卒業して半年も経ってからの事だった。1956年のハンガリー動乱の2年後、ハンガリーの情勢も少しは変わり、日本語を教えるという大義名分があれば何とか入国許可が降りるだろうとのハンガリー側、コダーイ・ゾルタンからの依頼を受けた、当時の工芸美術館館長ホルバート（Horvath）の働きかけがようやく功を奏したのだった。

1958年から1967年までの9年間に亘って、ブダペストにあるELTE大学で日本語を教えた羽仁協子にとってそれはあくまでもハン

ガリーに滞在するための手段であった。大学の講師になって生活を立て、実はハンガリー語を勉強したかったという。親の顔を立てるためハンガリー滞在最初の1年間はコダーイ音楽研究所に通い、収集された民族音楽分類の手伝いをしたり、日本から来る研究者等、来客の世話をしたりしていたが、羽仁の興味の中心は既に音楽からハンガリー語、ハンガリー文学へと移っていた。

ウィーン滞在時代から、最初は独八辞書と入手可能なハンガリー語の本を使って独学で、ハンガリー語の勉強をし始めていた。どこに行ってもハンガリー人を捜して、教えてもらいながら勉強をした。そしてハンガリーに行ってからはずますます情熱を傾けてハンガリー語の勉強をするようになり、ハンガリーの文学作品を読み、またハンガリー人の友人との共同作業で日本文学をハンガリー語に翻訳するようにもなった。

そのかたわら、ハンガリーに滞在し続けるために、日本語を教えていたのだ。羽仁によると、彼女が時間講師で週に2時間の日本語クラスを担当するようになる1958年までELTE大学においては日本語のクラスはなく、日本語教育は中断していたらしい。また大学で教えたといっても受講生は大学生のみではなく、社会人が大勢いたという。1950年代後半から1960年代の当時、第2次大戦時に日本と共に枢軸側として戦ったハンガリーには「八紘一宇」的な精神がまだ残り、またツラン運動の影響もあり、狂信的ともいえる親日家が多くいた。日本語クラスの中にも昔の国家主義的な時代の日本を好む年配の男性が多かった。そしてその人たちは、ちょうど羽仁がハンガリー語を独学で勉強したように、入手困難な本をよ

うやく手に入れて日本語を独学で勉強していたのだった。正真正銘の日本人が日本語を教えに来るという事で、大学生に混じって、多くの社会人が、上は60代の年配の人たちまでが習いに来た。羽仁の記憶によると、大学生は、羽仁がハンガリーに滞在した9年間に5 - 10人くらいしかいず、主には社会人の参加だったという。この数少ない当時の大学生の中から今ハンガリーの日本語教育界で活躍している日本語教育推進者がこの時育っていた。たとえば、ヴィハル・ユディット (Vihar Judit)、ヒダシ・ユディット (Hidasi Judit) 等である。

若くて、勉強熱心な大学生以外の多くの年配の人々は、発音にもひどい癖があり、覚えも悪かった。また、羽仁は国粋主義的な言動に反発を覚えていたこともあり、クラスで何度も大声で怒ったという。本人は日本語を教えるのはあくまでも手段であり、従って「片手間だった」と公言する。しかし、その当時、羽仁から日本語を習ったビハル・ユディットはその熱心な先生ぶりを「教師の鏡」と賞賛している。羽仁自身の言葉は謙遜に過ぎず、筆者が面談の際に得た印象、また羽仁を知る人達の評判からも、実は立派に日本語教授の責務を果たしていたと推測される。「教える事自体は好きだし、その上外国に来て以来、習う事ばかり多くて、久しぶりの教える立場は小気味が良かった」と羽仁自身も述懐している。

・第二期 (1980年半ばから1999年)

ハンガリーにおいては、ベルリンの壁が崩壊した1989年より以前から政治的社会的な変動の兆しが強く現れていた。東欧の共産主義は既に破綻し、完全に行き詰まって

いたのである。ハンガリーの著名な社会学者、ハンキッシュ・エレメール (Hankiss Elemer) は「1980年代、指導層のエリートがイデオロギー的な自信を失い、また家族や個人が自立するようになって、社会や教育に与える共産党の影響は急激に力をなくした」(1990: 115)と指摘している。共産党の力が衰退したこの時期の1980年代後半に、日本語教育発展の兆しが見え始めた。1986年には日本語教育が最初に実施されていたELTE大学に日本学科が正式に発足している。

- 1 ハンガリーの教育制度

半世紀近くの社会主義時代が終わりを告げ、1989年末の体制転換の後、外国語教育に大きな変化が起こった。それまで必修だったロシア語が自由選択になったのである。ロシア語必修から解放されたハンガリーの人々の多くは第一外国語として英語またはドイツ語を勉強し始めた。西隣にオーストリアと国境を接するハンガリーにとって、かつてのオーストリア・ハンガリー二重帝国の名残りもあってかドイツ語は英語に並ぶ第一外国語として人気が高い。そして、数ある外国語の中で日本語の学習も第二、第三外国語として人気を集め始めたのである。

ロシア語が必修外国語でなくなったことが、日本語教育の発展につながったことは否めない事実だが、それだけではない。教育制度自体が変わり、それが日本語教育の広がる土壌を作ったということも言える。ここでハンガリーの教育制度についての状況を見ておこう。

学問の長い歴史と伝統を誇るヨーロッパ

の一国として、「ハンガリーの教育制度は歴史も古く、また世界的に見ても非常に優れたもので、教育レベルも高い」と1998年に実施されたOECDの調査報告（1999：13）にも述べられている。しかし制度的には1989年の体制転換により様々な教育改革が行なわれており、今なお過渡期の混迷から抜け出していないのが現状だといえる。伝統的な初等教育8年、中等教育4年というパターンから、初等教育4年、中等教育8年或いは初等教育6年、中等教育6年、そして初等中等が一体化した12年制の学校も出てきている。生徒の能力をより効率的に開発しようという試みである。Halasz（2001）によると、従来は6歳で入学し小学校8年を修了するのが14歳であったのが、今多様化する教育制度の中で、6年間の初等教育を受け12歳で職業訓練校に入ることも出来るようになってきている。個人の能力に応じ、勉強があまり得意でない生徒は、早く他の技術を身につけられるようにとの意図である。

また以前は学区制で、住居から一番近い学校へ通うのが普通であったが、教育改革の一環として、子供の興味や能力に応じた学校を自由に選べるようになった。少子化⁸⁾が進む中、生徒数の確保が困難になって来ている上、面白くなさそうな学校へは子供が行かないような状況になった。「語学教育はIT教育と並んで初等・中等学校では重要視されている」（OECD1999：15）との記述があり、確かに外国語教育の最重要課題である英語とドイツ語に関しては様々な特別措置がある⁹⁾。そして、日本語という目新しい科目を開講して生徒を集めようとする学校も出てきている。

中等教育機関の種類としては進学が主目

的のギムナジウム¹⁰⁾の他、職業訓練校、専門学校などがある。ギムナジウムはもともと4年制だったのが、現在は前述の通り6年制もあり8年制もある。職業訓練校や専門学校は主に2 - 3年制である。高等教育は5年制のエジェテム（Egyetem）と4年制のフューイシュコラ（Foiszkola）がある。日本語にすると両方「大学」になってしまうのだが、厳密に言うとフューイシュコラは短大で、エジェテムは大学院に相当し、エジェテムを修了すると修士号を取得できる¹⁰⁾。

体制転換による、計画経済から市場経済への移行後、10年以上経過した現在も大学教育の改革は遅々として進まず、今の社会が必要としている人材を輩出するにいたっていない。「大学側、教授陣の都合や興味で教育の内容が決められている」（OECD, 1999：45）のが現状である。しかし、このような現状にもかかわらず、大学への進学率は増加の一途をたどっている。1980年代の終わり10%だったのが1996年には20%になり、2005年には30%に達するであろうとの予想が立てられている（OECD, 1999：19）。アメリカの東欧専門家、ヴァーデリー（Verdery）はその著書（1996）の巻頭に「社会主義とは資本主義から資本主義への最も長くて辛い道のり」との皮肉な言葉を掲げているが、その長くて辛い道のりの末に訪れた市場経済、そしてより充実した資本主義の到来にむけて、ハンガリーの若者の、学問あるいは学歴に対する期待の大きさがその数字に表れているのではなかろうか。

- 2 才能開発実験教育

ハンガリーの日本語教育における一つのユニークな点は、かなり早い時期から小学

校で日本語が教えられ始めたということである。1986年ELTE大学の正式な日本学科発足に続いて日本語教育が始まったのは高校ではなく小学校であった。1987年にはブダペスト郊外の小さな町トルクバーリント (Torokbalint) の小学校で実験的に日本語が教えられ始めた。トルクバーリント実験小学校においては1987年に当時の校長の意向で招聘されてきた教育学者ジョルナイ・ヨーゼフ (Zsolnaj Jozsef) の指導の下で42科目という数多くの科目が生徒の能力や興味に応じて教えられるジョルナイ・システムと呼ばれる「才能開発教育」が始まった。そしてその科目の中に日本語があった。自由な雰囲気の中で、なるべく子供たちが好きなことを学ぶことによって、各自の才能を伸ばそうという教育方法である。トルクバーリント小学校のジョルナイ・システムの下で日本語を教え、また日本滞在中にハンガリー語の日本語文法書を書き下ろしたキッシュ・イロナ (Kiss Ilona) はジョルナイ・システムの日本語導入に関して以下のように解説している。「日本語は表記とその複雑な読み方を習得する際に、脳の抽象的な言語の思考機能を開発するのみにとどまらず、具象体として視覚にも訴える。またひらがな、カタカナの書き方の練習が、「お絵描き」に似た脳の機能をも刺激するので、子供の頭脳の総合的な成長が期待できる」というのである。確かに、一画の簡単な仮名文字と、画数の多い複雑な字を、同じ大きさの枠目にバランス良く書くことは小さい子供にとってそう簡単なことではない。それが子供の脳の活動を促すのであろう。

- 3 オープン・ソサエティ

日本の雑誌に紹介されたトルクバーリント実験小学校の「才能開発教育」の記事を読み、その画期的な子供中心の学校教育を自分の目で確かめたいと1990年、日本の若者Xがハンガリーにやって来た。体制転換後は外国人も、自由に出入りすることが出来るようになっていた。1956年のハンガリー動乱時に祖国を後にして、アメリカで大富豪になったシヨロシュ¹⁾が標榜する「オープン・ソサエティ」の到来である。ジョルナイの教育理念に賛同したXは1991年1月から同小学校の日本語教師として活動を始めた。授業で日本語を教える傍ら、彼は「地球の歩き方」という旅行ガイドブックに学校の紹介記事を投稿し、日本人客の来訪、授業参観を呼びかけた。日本語を一生懸命に勉強しても、日本人に触れる機会の少ないハンガリーの田舎町に住む自分の教え子たちに生の日本語を聞かせてやりたい、さまざまな日本人に会わせてやりたいという気持ちからである。ハンガリーに来る日本の旅行者に、彼の日本語クラスを訪問してもらい、日本語を勉強している子供たちとの交流を図り、生徒の日本語学習の動機付けをより明確で、強固なものにしようという意図である。この計画は大成功を収め、投稿記事を見た多くの日本人旅行者が学校を訪れてきた。子供たちは多くの日本人旅行者たちと日本語で話し、さまざまな日本人とふれあうことができた。また日本人旅行者も、ハンガリーの小学校を訪ね、普通の旅行では見られないハンガリーの一面を見ることもできた。そして、こうして訪ねてきた旅行者の中からXの後を継ぐような

形で日本語教師になり、今なおハンガリーで教えている人たちも現れている。現在トルックパーリントでハンガリー人教師とともに教えているYもこうして、ハンガリーの日本語教育に足を踏み入れた若者の一人である。

Yは大学在学中の1995年冬にハンガリーを旅行し、トルックパーリントの日本語のクラスを見学に行った。そこで日本語を勉強するハンガリーの子供たちの可愛さに魅了された。1996年、Xが日本語研究で修士号を取るために一時帰国するに当たって代替教師を探していたとき、ちょうど、Yは大学を卒業し就職の時期だった。Yはハンガリーで日本語を勉強する子供たちの笑顔が忘れられず、ハンガリーに渡り、子供たちに日本語を教えることにした。以来現在もハンガリー人教師とのチームティーチングを続けている。そして、筑波大学で修士号を修めたXもハンガリーに戻り、後述するカーロリ・ガーシュパール大学(Karoli Gaspar Reformatos Egyetem)で日本語教師としてハンガリーでの活躍を続けている。このように、この時期、政治体制が変わり、国が開かれたことによって、日本からの若者が自由にハンガリーで活動できるようになった。このことがハンガリーの日本語教育の発展に大きな変化を与えている。

- 4 日本の国際協力

1989年11月のベルリンの壁崩壊に象徴される世界の動きに対応すべく、当時の首相海部総理大臣は1990年に欧州を歴訪した。そして激動する東欧情勢にかんがみ、経済、技術、食糧援助など多くの分野で積極的な援助をすることを表明した¹²⁾。そして、外務

省下の特殊法人で政府開発援助の実施機関である国際協力事業団は青年海外協力隊¹³⁾の派遣からハンガリーへの援助事業を始めることにした。国際協力事業団内部資料によると、ハンガリーに対しては協力開始のための調査団が1990年内に二度派遣され、1990年4月の事前調査においては、「ハンガリー側はすでに技術・文化の面では相当の水準に達しており、両国の関係強化を図るためには、日本語教育及び武道関係分野の文化協力が有効であろう」と示唆された。

青年海外協力隊がハンガリーに派遣開始されるにあたって、まずその調整員事務所がブダペストに開設され、短期緊急派遣という形態で1992年3月に2名の日本語教師が送られた。以来、JICA/JOCVハンガリー事務所によると、1999年末までに延べ44名の協力隊日本語教師が派遣され、ハンガリーの日本語教育に携わっている。協力隊日本語教師の派遣によって、日本語教育を実施する教育機関の数が大幅に伸び、従って、日本語学習者数も増加した。首都ブダペストに集中していた外国語教育の機会は、この協力隊日本語教師の地方派遣によって、ハンガリーのより多くの地方都市の住民にも受益の機会が広がった。

また国際交流基金¹⁴⁾も、1991年の9月に全東欧を管轄する事務所をブダペストに開設した。以来、日本文化の紹介の一部として日本語教室を開講するほか、日本映画の紹介、日本関係図書の公開等をしている。日本語学習教材寄贈、現地人日本語教師の日本研修、日本語および日本研究の専門家派遣等々のプログラムでハンガリーにおける日本語学習を支援する態勢が整った。

そして、それから約十年を経過した今、

ハンガリーにおける日本語教育史概観

協力隊日本語教師から日本語を習った生徒の中から日本語教師になろうとする者も出始めている。下に数量的変化の簡単な統計を示す¹⁵⁾。

	1990年以前	1998年
日本語教育機関数	4校	24校
日本語学習者数	100人	845人
日本語教師数	7人	50人
日本語教育実施都市	2都市	11都市

この数字から1990年代の大きな伸びが見て取れる。

- 5 青年海外協力隊日本語教師会

協力隊日本語教師はハンガリー全国に散在して活動しているが、自主的に定期的な集会を持ち、日本語教授法のいろいろ、クラスコントロールのヒント、新しい教材等々の情報交換及び勉強会を行っている。1999年12月からの開催で¹⁶⁾、2000年、2001年は6月と12月の年2回ずつ開かれていた。毎回日本語隊員の他に、協力隊事務所長、調整員、大使館文化担当書記官、国際交流基金ブダペスト事務所長、日本語アドバイザー¹⁷⁾及びハンガリーの日本語教育に詳しいゲスト講師を迎えて行なわれている。非常に熱心にハンガリーの日本語教育に関する話を聞き、自分たちの経験を語り合い、週末を費やしてハンガリーにおける日本語教育について討議討論する。

筆者もこの会合に3度参加したが、その討議内容や研究発表はかなりレベルの高いものである。ここにいくつか隊員の発表報告のテーマを紹介すると、「試験問題失敗集」「ハンガリー人のためのひらがな導入法紹介」「小学生対象授業の留意点、文化紹介」「ハンガリーを意識した授業」等がある。実際に自分たちが工夫して作成し、授業で使った教材を配布し、経験談を基に議論し、

アイデアを交換し合ったりする。ハンガリー人の教師に囲まれて仕事をしているので、日本についてのハンガリー語の教材を作るにも、良い物が出来るようだ。小学生対象のものでも日本文化紹介のハンガリー語資料など非常にレベルが高い。

またこの会の有志で作られた教科書作成委員会がある。高校に派遣された隊員が中心になって独自でハンガリーの高校生の生活事情に即した教材を開発しようと1994年に結成された。そしてその成果が『ハンガリー人のための日本語 / 』2巻として形になろうとしている。1巻A4版160ページ、20課からなる初級の教科書である。教科書作成委員会結成以来9年間にわたり総計18名の日本語教師隊員が協力して作成したものである。複数の高校で試用し、改訂のため60回以上のミーティングを重ね、ようやく2002年9月の段階で下刷りが出来た。構成はまず高校生が興味を持つような本文を中心に文法、漢字、練習問題、そしてコラムとなっている。コラムには、ハンガリー語による文法の補足説明や日本文化、習慣、歌の紹介等が盛りこんである。

『ハンガリー人のための日本語 / 』にある前書き『はじめに』によると、「自然さを追求した面白みあふれる本文」が最大の特色であり、目標はハンガリーの日本語を学ぶ高校生に言葉を学ぶ楽しさを知ってもらうことであるという。本文のストーリーはハンガリーと日本の高校生の交流を通じて、生徒達の身近な日常生活の様々な場面や学校生活に関する話題を中心に、お互いの生活習慣を紹介しあったりする。会話文のみではなく、手紙文や日記文などもとり入れられており、工夫が見られる。巻末にはカ

タカナ表記のハンガリー人の名前、国名、地名リストの他、9ページにわたる単語リストが付いている。未だに日本語・ハンガリー語、ハンガリー語・日本語の適当な辞書がなく、英語やドイツ語などの主要外国語を介してしか辞書が引けない現状においては非常に有用である¹⁸⁾。この他にも、ハンガリーにおける日本語教育においては独自の教材が初等教育、高等教育においても各教育機関で開発されている。次に協力隊日本語教師が実際に活動している、あるいは過去に活動していた現場をいくつか紹介する。

< - 5 - 1 初等教育：ヴィラーニョッシュ小学校 >

ブダペストの12区という地域は在ハンガリー日本大使館が位置する、高級住宅街である。このような環境にあるこの小学校はさまざまな意味で恵まれている。外国語も英独日の三言語から選ぶことが出来る。日本語教育は1991年から始められ、2002年の時点では二人のハンガリー人教師が教鞭をとっている。自らの子弟に日本語を習わせたいと思ったハンガリー人日本語教師が、自宅付近にあった当小学校の校長に働きかけて、日本語開講に至った。当時、ブダペストに滞在していた一日本人の協力を得、独自で子供向けの教科書「やさしい日本語」を作成し、チームティーチングで教えた。その日本人協力者が帰国した後、協力隊日本語教師が派遣され始め、中心になるハンガリー人教師とともに小学生に日本語を教えた。数年後、派遣は中止されたものの日本語教育は着実に継続されている。

ここヴィラーニョッシュ小学校の生徒が

英語やドイツ語を習い始めるのは小学3年生からである。しかし、日本語は文字がアルファベットではなく、その分、習得事項が多いという理由から他の外国語より1年早く小学2年生から始められる。選択外国語の一つとして日本語を開講するかどうか、また日本語は他の外国語より1年早く導入する等の事項は全て校長の権限において決定される。勿論担当の日本語教師と相談のうえではあるが校長の日本語に対する熱意が端的に表れる。ここヴィラーニョッシュの場合、校長は自らの2人の子供たちにも日本語を取らせているほどの日本語推進派である。

小学2年生の子供たちは、「こんにちは」「さよなら」などの挨拶のほか、ひらがなは「く」「し」「つ」等の簡単なものから習い始め、お絵描きや歌などをまじえて、楽しく日本語に親しみ始める。多くの成人学習者にとっては負担の大きい日本語の文字学習も、子供たちは嬉々として、遊びの中で覚えてしまう。文字、少なくともひらがなを習得してしまっていると、高校生になって日本語を継続する場合、文法事項や難しい漢字の学習に集中できるので、学ぶほうも、教えるほうも非常に楽である。

1997年当時、この小学校で日本語を習い始めた生徒が高校へ行く年齢に達したとき、同学区に日本語の勉強できる高校がなかった。継続して日本語を勉強したい生徒は、そのためにわざわざ遠くの高校へ行かなくてはならなかった。しかしこれはまもなく改善されて、近くの高校でも日本語が開講されるようになった。そして、すでにその高校からも日本語を勉強した生徒が卒業しようとしている。

このほか地方の小学校においてもいくつかの都市で日本語教育、日本文化紹介が試みられている。小学校教員や生け花という職種で派遣された隊員が日本語を教えている場合もある。

< - 5 - 2 中等教育：パビチ・ミハーイ
とテレーズ・ヴァーロシュ >

1990年に中等教育機関でいち早く日本語コースを設置したパビチ・ミハーイ・ギムナジウム (Babits Mihaly Gimnazium)⁹⁾はハンガリーの高校においては最も長い日本語教育の歴史を持ち、充実した内容で評判も高い。協力隊日本語教師も1993年から派遣されつづけ、現在5代目の隊員がハンガリー人カウンターパートとともに高校生を相手に日本語を教えている。日本語のクラスは多くの場合、クラブ活動や自由選択科目として扱っている学校が主流であるのに対して、パビチでは選択必修という位置付けである。そして週6 - 8時間もの日本語クラスがある。普通ハンガリーでは、外国語の必修学習時間は週3時間なので、学校側の日本語教育に対する力の入れ方が分かる。日本語の好きな生徒にとっては良いことなのだが、1年生の初めにいったん授業登録すると卒業するまでの4年間途中で止めることはできない制度を採用しているため、途中で日本語学習への興味を失ってしまい、他の科目に代えたいと思ってもできない。やる気がなくても授業に出なければならぬので、生徒にとっても教師にとっても困難な状況を生み出す結果にもなっている。

しかし、多くの学生は進んで日本語を学んでいる。そして、ここでの協力隊日本語教師とその生徒のふれあいが新しいハンガ

リー人日本語教師を生み出そうとしている。生徒とそう年齢も変わらない協力隊隊員は授業が終わると友達同志という関係になる場合が多い。とても親しい友達になり、日本語を教えてもらっているうちに自分も日本語の先生になりたいと思う生徒が出てきている。協力隊日本語教師の教え子がハンガリーで日本語の先生になる日は近い。

第一章でも述べたように、少子化が深刻に進むハンガリーであるが、生徒数の確保は学校運営上の最大関心事の一つである。また、ハンガリーの公立初等中等教育機関への国からの基本予算は生徒数によることから、生徒、また生徒の親に対するアピールが重要になってくる。パビチの場合、日本語を勉強するために、遠くから生徒が通ってくることもあるという。

テレーズ・ヴァーロシュニカ国語学校 (Terezvaros Kettannyelvu Altalanosiskola es Gimnazium) は1867年創立の由緒ある学校で、ブダペストの繁華街の中心に位置している。1年生から8年生までの初等教育の部と9年生から12年生までの中等教育の部からなっている。この学校の「ニカ国語」という名前は、ハンガリー語のほかにももう一つの言葉で授業が行なわれるバイリンガル教育を実施しているという意味である。テレーズの場合は生徒をAグループとBグループの二つに分け、Aグループはハンガリー語とドイツ語、Bグループはハンガリー語と英語で授業が行われる。この制度は1990年から開始されたのであるが、それからまもなく選択第二外国語として日本語が選べるようになった。中等教育における日本語教育ではここもパビチと同じく早いスタートである。1992年の協力隊日本語教師

の派遣をきっかけに日本語クラスが開講された。開始の時は生徒数も少なく協力隊隊員だけで教えていたのだが、年を経、生徒が増えるにしたがって、一人では教えきれなくなり、ハンガリー人の日本語教師が、日本人といっしょに教えるというチームティーチングが始まった。それ以来、この形態はずっと継続されている。

日本語が選択できるのは9年生からであるが、9・10・11・12年生それぞれに週3 - 4時間の授業があり、ここで初めて日本語を習って、大学に行っても続けるという生徒もかなりいる。ここにも現在5代目の協力隊日本語教師が派遣されており、バビチ・ミハイと並んで中等教育における日本語教育の名門校で、真剣に日本語教育と取り組んでいる。ともに日本語のしっかりしたハンガリー人カウンターパートがいるという点でも共通している。「ハンガリー人日本語教師はいても、母語話者ではないので、協力隊からの派遣日本語教師は不可欠だ」と、両校とも学校側は強く派遣継続を望んでいる。これは筆者が校長および、日本語担当者にインタビューした際に得た情報である。

< - 5 - 3 高等教育：カーロリ・ガーシュパール大学 >

カーロリ・ガーシュパール大学はもともと神学大学であったということで、社会主義時代は閉鎖されていた。体制転換後の1990年から総合大学に改変され、法律の部門を併合し、人文学部も併設し再開した。大学内部資料によると規模及び学生数の点で、ハンガリーで一番小さい大学であるという。そしてこの人文学部の中で1990年初

頭から日本語教育が徐々に始まり、1994年には本格的な日本語専攻科が開設され、以来、力を入れて取り組まれている。ここではELTE大学で日本語・日本研究を修めたハンガリー人の教授陣が数名の日本人教員とともに日本語教育に当たっている。常勤、非常勤を入れると10名を超える幅広い教授陣を誇り、日本語教育の内容も充実している。教員養成プログラムもすでに開始され、日本語教育においてはその歴史を誇るELTE大学を凌駕する勢いで教師陣が、その教育制度の整備にも真剣に取り組んでいる。特に、前述のXをはじめ、日本人スタッフの力の入れ様は特筆に価するだろう。ハンガリー一小さい大学のハンガリー一立派な日本語学科を目指して、日本語教育の充実に取り組んでいる。

この大学への最初の協力隊日本語教師は、他の配属先と兼任という形で入ることになった。1994年に協力隊日本語教師としてブダペストから20キロばかり離れた町の別の大学に赴任していたZである。延長を重ねた3年4ヶ月の任期が終了する頃、カーロリ・ガーシュパール大学でも臨時講師として教えるようになっていた。Zの任期終了による帰国を知ったカーロリ・ガーシュパール大学は、協力隊の任期が終わった後も、続けて教えないかと打診してきた。日本語コースを開講以来、日本語専攻の新しい学生が毎年増え続けていく状況の中、教えなれた日本人ネイティブ・スピーカーの教師を確保したかった大学側と、日本語教師としての活動を続けたいと思っていたZの希望が合致し、実現した。1997年3月のことである。Zが協力隊を離れて感じたことは、個人の一日本語教師としての孤立感であっ

た。教師仲間の間には何の繋がりもなく、情報もなく、協力隊時代にはあった日本政府からのサポートもなければ、仲間も居ない、どこで、どんな人が、どんな学生を相手に、どんな授業をしているのか、全く情報がなかった。このことが後述のハンガリー日本語教師会発足の端緒になった。協力隊日本語教師は、Zのあと、もう一名の受入れを最後にカーロリ・ガーシュパール大学からの要請は停止された。日本語学科長の話によると、協力隊派遣が永続的に続くわけではなく、いずれは撤退していくであろうから、また、協力隊は任期が短く2年以内で²⁰⁾次々に交代するので、一緒に仕事がしづらいからという理由からである。

教師陣の充実したカーロリ・ガーシュパール大学は多くの学生の要望に応えるべく、新しいプログラムを開講している。高校までに日本語を学習する機会はなかったが、大学から日本語を学びたいという学生の為のコースである。日本語科への入学は日本語の試験に合格しなければならないため、1年生に入学する前に、日本語入学試験の受験に備えるのだ。このクラスは有料で、大学の大きな収入源になっているという。そう安くない授業料を払ってまで、日本語を勉強したいという学生が、毎年10 - 15名いる。カーロリ・ガーシュパール大学は現在ハンガリーの日本語教育をリードする存在となるべく、着実に業績を上げて行っている²¹⁾。そしてハンガリー滞在9年目、元協力隊隊員のZもその大きな推進力になっている。

< - 5 - 4 高等教育：ブダペスト商科大学 >

ブダペスト商科大学 (Budapest Gazdasági Főiskola) はハンガリーの近年の大学構造改革で他の2つの大学と併合されて、より大きな学校となったが、以前は外国貿易大学 (Kulkereskedelmi Főiskola) と呼ばれていた。外国貿易大学時代の1984年から日本語クラスが開始され、今も多くの優れた実用日本語話者を輩出している。ここでの日本語教育の主導者は1960年代にELTE大学で副専攻として前述の羽仁から日本語を学んだヒダシ・ユディットである。もともと、彼女の主専攻だったロシア語を教えていたのだが、日本留学後、日本語も教え始めた。

4年制の大学で、ここへは日本語の基礎知識が全くなくても入れる。日本語の生徒数はおよそ50名、最初の3年間に500時間の授業を受ける。それだけの時間数で充分話せるようになるのはかなり困難だということで、次のような目標設定をしている。「日本人の思考様式や行動様式を良く理解した上で、英語あるいは他の外国語でコミュニケーションを行なう人材を養成することが目的である。しかし日本で仕事をしたり、また日本人と仕事をしたりする機会が出てきた時に、比較的、短時間で容易に日本語でコミュニケーションが出来るようになることを目指している。」(佐藤, 2002: 82)

高等教育機関における日本語教育のパイオニアの一つでもあるブダペスト商科大学はヒダシの日本人社会との強いネットワークを生かし青年海外協力隊の派遣が始まるとすぐに、その受入先となった。以来、現在に至るまで協力隊日本語教師はブダペス

ト商科大学の欠かせない人材となっている。1992年の青年海外協力隊派遣開始と同時に常時一人の日本語教師のほかに、時には二人目の隊員²²⁾をも確保してきている。2002年9月現在6代目の隊員が日本語を教えている。他に中心になっている教師はハンガリー人、ハンガリー在住の日本人で、教材も独自で開発したものが豊富に揃っている。

- 6 日本語を取り巻く環境

1980年代、社会主義体制下、既に日本の自動車メーカー、「スズキ」はその工場建設をハンガリー北部のエステルゴムという街に計画していた。この計画が実現し1993 - 4年から操業が開始されたが、当初数年間は、「仕事」というものに対する日本人とハンガリー人の価値感の相違から発生するさまざまな問題に悩まされていたという。また、累積赤字も大きな問題であった。ハンガリー支社長の話によると、2000年に入ってようやく黒字に転じ、最近ようやく累積赤字も解消され、今工場の拡大が計画されている。

1990年代前半は未だ、ハンガリーの経済動向の先行きも不透明性が強く、日本企業の進出もそれほどではなかった。1990年代の半ば、ブダペストの東約20キロに位置する小さな大学街、グドゥルーにソニーがその工場を建てたのをきっかけとし、多くの日本企業がハンガリーに進出してくるようになった。その数は1990年代後半から増加を続けている。長引く日本の不景気で、ハンガリー支店を畳んで、引き上げていく商社や銀行もあるが、一方で日本の不景気を乗り切る一つの方策として海外に進出してくる製造業の会社が工場を建てる場合もあ

る。また製造業が行き詰まり、引き上げてしまうと今度はIT関連企業がそれに取って代わるというのが最近の動向であるとジェットロのブダペスト事務所長は分析する。そして、差し引きすると在留する日本企業数は増加しているのである。それが日本人社会の拡大につながり、日本語を取り巻く環境をより充実したものにしているといえる。

1994年には「パブリカ通信」という日本語ミニコミ誌が発行され始めた²³⁾。始めた当初は簡単な手作りであったが、発刊以来20年近く経過し今では立派な表紙のついたA4版12 - 16ページからなる機関紙になっている。

・第三期（2001年以降）

- 1 ハンガリー日本語教師会発足

1996年に既に発足していたヨーロッパ日本語教師会への年次大会出席がきっかけで、ハンガリー - 日本語教師会が2001年2月に結成された。このハンガリー日本語教師会発足に当たっては、前述の元協力隊日本語教師のZが非常に大きなきっかけを作った。1998年の夏、在ハンガリー日本大使館を通じてZはベルリンで開催された日本語教師研修会に参加する機会を得た。そして、そこでヨーロッパの色々な国の日本語教師仲間と知り合い、さまざまな有益な情報があることを知った。ハンガリーの日本語教師の人達にぜひ知らせたいと思ったが、その手立てがなかった。ごく一部の自分の周りにはいる教員以外、どこで誰が教えているのかさえ、Zにはわからなかった。ハンガリーにおける教師間を結ぶ何らかの組織の必要性を痛感したと面談の際、Zは述べた。

二年後、Zが2000年8月ヘルシンキで開

ハンガリーにおける日本語教育史概観

かれた、ヨーロッパ日本語教師会に出席した時に、一緒に出席していたハンガリーからの他の日本語教師たちと初めて発足の相談をすることができた。そして、そのヨーロッパ日本語教師会総会の会場で、翌々年2002年の年次会議はブダペストを会場に、ということが決まり、そのためには早急にハンガリー日本語教師会を発足させて、準備にかかる必要があるという状況になった。直ちに準備委員会が結成され、ハンガリーの日本語教師を対象にアンケートを取り、「ハンガリー日本語教師会は必要ですか」と問い掛けた。返送された回答のほとんどが「必要」という答えだった。

2001年2月にハンガリー日本語教師会は正式に発足し、初代の代表にはZが選出された。以来、一般的な情報交換はもとより、日本語教師間のネットワークが構築され、強化されている。初等教育から中等、中等から高等教育への教授内容の連携が今までまったくなされていなかったもので、それぞれの守備範囲の整理と到達目標を明確にすべく、各教育レベルでのガイドライン作成がはじめられた。また全国統一高校卒業試験見直しのため中等教育機関の教師を中心に、自主的に分科会を結成するなど活発な活動が始まった。

ハンガリー日本語教師会の設立によって、ハンガリー国内の日本語教師たちがさまざまな恩恵を享受することになった。それに加えて、対外的にもハンガリー日本語教師が国際的に一つの単位となって活動することも可能になった。ヨーロッパ日本語教師会年次大会国際シンポジウムが2002年9月6・7・8日、ブダペスト商科大学で開催され、成功裡のうちに終了した。ハンガリ

一の日本語教育はハンガリー人の手で、ということで、すでに会の代表はZからブダペスト商科大学のセーカチ・アンナ(Szekacs Anna)にバトンタッチされていた。セーカチがその流暢な日本語でシンポジウムの進行役をこなし、堂々と前面に出て、ハンガリーの日本語教育の確固たる存在感を世界に向かって示したのである。

- 2 在ハンガリー日本企業

ジェットロのブダペスト事務所は2001年9月の時点で、ハンガリーを含むヨーロッパは、世界最大の経済圏であるアジアに次ぐ発展、成長が期待できると分析している。ヨーロッパの中でも、人件費を含む物価の安い東欧が日本企業の投資の対象になっている。そしてその東欧諸国の中でも、欧州連合次期加盟指定国のハンガリー、ポーランド、チェコに集中している。

日系企業進出概況(2001年8月:推定)²⁴⁾

	進出企業数	投資額 (百万ドル)	投資件数
ハンガリー	100	800	80
ポーランド	82	450	60
チェコ	94	770	75

ジェットロ、ブダペスト事務所長の話によると、体制転換直後の90年代初頭はチェコが順調にその経済政策を成功させていたが、近年はハンガリーがチェコを追い抜き日本からの最大の投資を獲得しているという。そして、このことが在留日本人の増加を促し、日本語を取り巻く環境をより充実したものにしている。

ハンガリーにおける日本企業、特にオフィスの事務取り扱いにおいてはまだまだ、日本人、ハンガリー人がともに英語を通じ

てコミュニケーションしている場合が多いのだが、工場等生産の現場における、日本人技術者からの技術移転といった場面では、通訳の介在のもと、直接日本語が用いられる場合がある。この点においては日本語教育がハンガリーの経済発展に寄与していると言えるだろう。

一般的に日本語教育を論じる際、二通りの日本語教育が考えられる。一つにはアカデミックで且つ高度な日本研究への基礎として、もう一つには純粹にコミュニケーションの手段としてである。前者は歴史や美術、経済等の日本語の専門書が読めるようになるために日本語をマスターする。後者は、通訳者、翻訳者、ガイド等の日本語専門家を育てるための日本語教育である。ハンガリーの場合は現段階では前者の成果はまだあまり見られないようだが、後者においてはかなりの人材が輩出されている。1987年に日本語教育が始まったトルクバールント小学校で第一期生として日本語を学び、現在ELTE大学の5年生になっているナジ・アニタ(Nagy Anita)は2001年9月ELTE大学で開催された日本・ハンガリー・ドイツの国際シンポジウムで、ハンガリー語・日本語および英語・ハンガリー語の通訳を立派にこなしていた。このような日本語教育の充実が日本企業の進出を促し、また継続させている背景の一つであろう。

- 3 日本語刊行誌

在ハンガリー日本大使館領事部によると、在留日本人の数は継続的に増え、たとえば1997年当時は4 - 500人だったのが、2001年には1000人を超え、日本からの観光客は年間10万人に達するという。そんな時に二つ

目の日本語月刊誌「ハンガリー・ジャーナル」²⁶⁾が登場した。

ハンガリー語で書かれた、日本に関するミニコミ誌「あんじんさん」も同時に出版された。日本語を勉強している、したいと思っている、また日本語は勉強していなくても日本に興味を持っているハンガリー人のための機関紙である。ハンガリー人日本語学習者に有益な情報や、ハンガリー人日本滞在記、日本人のハンガリー語教師、日本語教師、ハンガリー人の日本語教師等の紹介等を行っている。

また同じく2001年にはハンガリー人日本語学習者用の機関紙「かりん」が発行された。1990年代のはじめからハンガリーで日本語を教えている前述のXの主導で2001年2月から発刊が始まった。ブダペストにある国際交流基金や日本企業の援助で発行を続けている。ハンガリー人の日本語学習者を対象に日本語で書かれ、ハンガリー語の説明や訳も必要に応じて併記してある。

これらの日本語に関わる定期刊行物の出現は日本人社会のネットワークやコミュニケーションを拡大、充実させたのみに留まらず、この事業に関わるハンガリー人、正確に言えば日本語を解する、ひいては日本に興味を持つハンガリー人の間にも少なからぬ影響をもたらしているのである。たとえば、日本関係の情報を共有することによって、ハンガリー人日本語学習者の間のコミュニケーションが密になり、ネットワークが拡充する。そして、日本語のできるハンガリー人が、編集に携わるということが実際に起きている。

- 4 学習動機

1960年代にELTEで日本語を勉強し現在、日本文学の翻訳などをしながら教員養成大学ほかで日本語を教えているヴィハル・ユディット(1999:13)は「どうして我が学生達は日本語を学ぶのか」という語学教師間の機関誌に掲載された記事において次のことを言っている。「外国語学習の目的は、当該言語の四つの技能(書く、読む、話す、理解すること)を習得するだけではなく、母語と外国語を比較することによって思考力を伸ばし、外国語における新しいものの見方や、考え方の秩序を理解することである。また、自文化とまったく異なる文化が存在することを知り、そして、それを受け入れることによって個人およびその人を取り巻くものが豊かになることである。」そしてその目的は日本語の独自性によってより効果的に達せられるというのである。なぜなら「日本語はその、いくつかの字の種類が混在している複雑な表記のため、ヨーロッパ諸言語より習得が困難だから」という論理の展開で日本語学習の動機につながる考え方を解説している。

また実際に日本語を勉強している学生達の生の声を聞くための調査も実施した。以下にその結果を記す。これは、筆者が2001年2月に実施したアンケート調査とヴィラニョーシュ小学校で日本語を担当しているゲルゲイ・ユリア(Gergely Julia)の調査をもとにしてまとめたものである。小中学生87名、高校生47名、大学生23名、社会人6名が対象である。「どうして日本語を勉強しているのですか?」という問いの答えを以下にまとめてみる。小中学生の場合は

無回答、チャンスがあったから、親に言われて等という比較的日本語に対して消極的な回答が約三割を占めている。しかし、約五割の子供は、日本のことが知りたいから、日本に行きたいから、日本人と仲良くなって話をしたいから、日本語、日本人、日本文化に興味があるからという積極的な回答をしている。またハンガリーにくる日本人観光客のガイドをしたいという将来の仕事に結び付けて考える生徒も一人あった。

高校生の場合は約半数が、珍しい言葉だから、まだあまり普及していないから、ヨーロッパの文化と異なる国の言葉だからというヨーロッパにおける日本語の特異性を理由に挙げた。そして、三割以上の生徒が、将来の仕事に役立つからという意味の回答を書いている。また日本文化に限定して興味を持つものは四割を切っているものの日本の武道をしたことがあるからという具体的な関心をもって日本語を勉強しているというケースも現れている。

そして大学生の場合は23名中、1名の無回答と、単に就職のためだけと答えた1名を除いた全員が何らかの形で非常に積極的に日本語、日本の文化に興味があるからと答えている。最初は親に言われて始めたが、勉強するうちに日本の文学、歴史、哲学に興味を持つようになり、今は自分から進んで日本語を続けているという者や、ハンガリー語と似ているからという言語学的見地から興味を持って勉強している者、日本人の考え方、習慣、日本人社会に興味がある者、エキゾチックだから、また、易しくないからという者等々さまざまである。また、空手など日本武道関係から日本語を勉強している者も増えている。

社会人の場合は、会社が週に1～3時間程度、勤務時間内外に日本語クラスを設けて、多くの場合無料で開講しているもので、学校教育の中における日本語教育とは意味付けも様相も異なるが、参考のために結果を記す。回答した6名全員が日本文化にはもちろん興味はあるが、仕事のために勉強していると答えている。

以上、アンケートの結果を見ると小中学生、高校生の約半数そして大学生の九割以上が日本への関心、珍しいものとしての日本語への興味から日本語を勉強しているということがわかる。そして、この興味を持つきっかけになったのが青年海外協力隊隊員の存在ということが往々にしてある。残念ながら、上記のアンケートの設問には含まれていなかったのだが、青年海外協力隊隊員を初めとする日本人との接触が日本や日本語に興味を持ち始めたきっかけになっていることは、実際に学習者と話してさまざまな機会に筆者が感じたことである。日本語教師に限らず協力隊隊員の存在は、日本語教育がより発展し充実していくために大きな貢献を果たしているといえる。

- 5 「日本の日」

ブダペスト及びその近郊の町の他にも、現在ミシュコルツ (Miskolc)、デブレツェン (Debrecen)、ヤスベレーニ (Jaszbereny)、ドゥナウイパーロシュ (Dunaujvaros)、バーツ (Vac)、カポシュパール (Kaposvar) 等の地方都市で若い協力隊日本語教師が活動している。最後に一つ言及すべき点は日本語教師の活動を様々な局面から支えている他の隊員たちの力である。日本に関する情報の少ない地方都市で日本語を教えてい

る隊員は日本文化紹介のための「日本の日 (ハンガリー語でヤパーンナップ: Japan Nap)」を設けて、様々な企画を工夫している。この「ヤパーンナップ」は普通、年に一回の学校を挙げての大イベントとなる。日本料理賞味コーナー、けん玉、ビーだま、カルタ等の簡単な日本のおもちゃで遊ぶコーナー、折り紙コーナー、習字コーナー等を準備し、地域の人達にも開放して日本の雰囲気を感じてもらおうというわけだ。このイベントに欠かせないのが剣道、柔道、合気道等々のデモンストレーションである。ハンガリーへの協力隊派遣は日本語教師とともに空手、剣道、合気道等、武道の指導者が多い。裏方として、または舞台の上の花形として多くの隊員がこの日の為に集合し盛り上げる。この『日本の日』は日本語教師一人では到底できない規模の晴れがましいイベントで、それを可能にしているのは多くの協力隊隊員達の結束である。

1992年以来、多い時には常時15名、少なくとも10名前後の協力隊日本語教師、他の隊員も入れると20名以上になる日本人青年がハンガリーに派遣され活動している。ハンガリーの人々とともに生活し、ハンガリー語を話し、ハンガリー人の同僚とともにハンガリー社会の中で働いている。地方都市に配属された者の中には町に唯一の日本人という環境で2年の任期を過ごす者もいる。言葉はもちろん、物の考え方、生活習慣、食べ物など、すべてがまったく異なるヨーロッパの、それも半世紀もの間、社会主義に閉ざされていた国での2年間の生活はそうたやすいことではない。しかも片田舎の小さい町での孤独な生活は厳しい。彼らの若さと情熱、真摯に日本語教育に取り

組む力がハンガリーにおける日本語教育の発展の原動力となったといっても言い過ぎではないだろう。

おわりに

国際交流基金1998年の統計によると845人のハンガリー人が日本語を学んでいる。1990年代半ばの日本語ブームの際には一時的な急増をみせはしたが、国際交流基金ブダペスト事務所およびハンガリーの日本語関係者は、ともに、当分の間は、この程度の規模でハンガリーの日本語教育は継続して行かろうという見方をしている。そしてその動機の主たるものは、前出のアンケートによると、日本への興味だと理解していいだろう。教養としての外国語学習という日本語の位置づけが確立しつつあるように見える。ハンガリーが政府として力を入れている外国語教育、英語・ドイツ語に関しては様々な言語政策が施行されているが、日本語の場合は、ハンガリー政府からの援助はほとんど期待できない。初等・中等教育の場合は各学校の校長の裁量一つで日本語教育の存続が決まるといってもよい。そのような状況のなか、1990年代の日本からの援助が大きい力となって、ハンガリーの日本語支持者たちを支える形で、ここまで発展し、充実してきた。

しかし、さきに述べたように、日本語学習者は世界的な規模で急増してはいるが、ヨーロッパにおける日本語学習者の数は全体の3%に過ぎない²⁶⁾。ヨーロッパから遠く離れた国の言語の一つである日本語はあくまでもマイナーな外国語に過ぎない。まして、EUの結末が強調される昨今、ヨーロッパ評議会の「外国語学習、教育、評価のた

めのヨーロッパ共同枠組み²⁷⁾によるとEU諸国においてはEU諸国の言語を少なくとも2つは学習し、ある程度のレベルに達しなければならないという基準も出来ている。このヨーロッパ内多言語主義について、ハンガリー日本語教育界のリーダー的存在、ヒダシ(2002:101)は「西ヨーロッパの場合には、統一の波にのって、日常生活に強く関わる殆どのがどんどん統一化されるので、国民はそれを自己のアイデンティティ喪失のように受け取り、このプロセスに対してただ一つ残ったアイデンティティのシンボルである言語・文化を以前に増して大事にしていく訳である。」と分析している。そして、この数年内にEU加盟を目標としているハンガリーにおいてもEU諸国語学習の気運が高い。

1990年代の政治、社会の変化、また青年海外協力隊の活動等を通じて日本からの国際協力の貢献が生み出した、ハンガリーにおける日本語教育の発展が今後どのような形でヨーロッパを超えた、世界の多言語主義への力となり得るのかを筆者は見守り、支援していきたい。世界が目指すところの多文化共生の大きな鍵を握る多言語主義の実現に向けて、日本語教育の果たす役割は今後ますます大きくなっていくと信じるからである。

本稿では議論できなかったが、今後、日本語教育が国際協力を通してどのような形で世界の多言語主義の実現に貢献することができるのか、また帰国協力隊隊員のハンガリーでの異文化体験が個人的、社会的にどのような影響を与えたか等、今後の検討課題にしたいと考えている。

注

- 1) ハンガリーにおけるNGOの調査のためではあったが、当時の協力隊調整員事務所を訪れ、ELTE大学に派遣されていた日本語教師隊員とも面談した。
- 2) 「エオトヴェシ・ローランド」という日本語表記は従来の国際交流基金の資料の表記に準拠した。ハンガリーでは一般的に「エルテ」と呼ばれている。このハンガリーで最も重要な高等教育研究機関の一つであるELTE大学は、日本では鎖国令が發布される1635年に創立されたヨーロッパでも有数の伝統を誇る大学の一つである。名前が何回か変わり1923年当時はパズマーニ・ペーテル大学 (Pazmany Peter Tudomanyegyetem) と呼ばれていた。なお、ハンガリー語の表記には母音の上にウムラウト (ハンガリー語ではエーケゼット) が付く場合があるのだが、技術的に困難であったので本稿では全て省略した。
- 3) (ハンガリー語では、名前の表示が、日本語と同じく姓名の順である。本稿ではそのままハンガリー人の名前は姓、名の順で書く。) ブルーレは後に『日本民族文学の小鏡』(仮訳): *A japan nemzeti irodalom kistukre* を著した。
- 4) 「ツラニズム」なる思想は「八紘一宇」のという国家主義的な思想のもとに繰り広げられた日本軍国主義に荷担する形で、日本とハンガリーの両国に一時的な広がりを見せた。このような背景で、日本語とハンガリー語との言語学的な親近性も日本語学習普及の遠因をなしたものとも考えられる。ELTE大学で日本語を教えたブルーレ・ヴィルモッシュも1920年代に日本を訪れツラン運動の活動をしている。しかし、日本における「ツラン運動」の痕跡は今となればほとんど認知されないばかりか、科学的に全く根拠のない主張だとする研究者も少なくない。例えば、家田の『日本におけるツラニズム』(1981: 209)によれば日本ではツラニズムはほとんど浸透しなかったと思われる記述があり、また南塚(1981: 60)はツラニズムというのは、学問的にまちがった基礎の上にあり、しかも反ソという非常に政治的なモチーフに規定されたものであったと断言している。
- 5) 東京新宿にての面談の際得た情報と著書『ブダベスト回想』と『ブダベストの古本屋』を対照させて記述した。
- 6) 彼の日本語についてはバリ滞在中に日本人の恋人がいて、それで習い始めたとか、戦争中シベリアに抑留されていて、その時に日本人捕虜たちから教えてもらったと言う話もある。これらマヨールに関する話は当時日本語の学生であったヴィハル・ユディット (Vihar Judit) や1970年代に留学生として来ハシ、後にマヨールと共に日本語を教え、現在もハンガリーの日本語教育を担う日本語教師の記憶によるものであるが、本人没後、記録も残っていない今となっては確かめる手立てがない。
- 7) 2001年11月現在、ハンガリーのリスト音楽院には、常に100名以上の日本人音楽留学生が勉強している。
- 8) ハンガリーは人口増加率が既にマイナスに転じている。Palmore (1994) によるとマイナス0.2%、そしてUN, *World Population Prospects*;1996によると1995年~2001年の数字としてマイナス0.59%となっている。少子化は進行している。
- 9) 普通、教員養成大学は4年制であるが、英語とドイツ語の教員免許に関しては3年で教員資格の取れる制度が導入されている。
- 10) ハンガリーの高等教育機関へは入学も卒業もかなり困難で、既定の年限内で修了する学生は少なく、何年もかけて修了する学生が多い。また、現行の制度では日本の四年制大学はハンガリーの短大(フューイシユコラ)相当に扱われており、教員の資格や給与決定の際に、日本の四年制大学卒

ハンガリーにおける日本語教育史概観

- 業生は不利な待遇に甘んじている。
- 11) アメリカの金融事業家、ジョージ・ソロシュである。ソロシュ(姓)はハンガリー語読み。彼は自らの成した資財を投じてソロシュ基金を設立し、東欧・旧ソ連諸国一帯の民主的社会的実現のため「オープン・ソサエティ」というスローガンでさまざまなプロジェクトに助成金を出している。
 - 12) 一般に「ベルリン演説」と呼ばれ、特に当時訪問を受けたポーランド、ハンガリー両国に対しては、総額19億5000万ドルにのぼる協力が約束された。
 - 13) 本来、協力隊事業は、いわゆる発展途上国を対象としたものであったが、東欧への協力は市場経済への円滑な移行を助けるということで実施されることとなった。また、当時協力隊事業は派遣倍増計画実施中であり、新たな派遣先として東欧は歓迎された。ちなみにハンガリーは1991年9月に55番目の派遣国として二国間協力が締結された。
 - 14) 日本の国際交流基金は1972年、当時の外務大臣、福田赳夫の発案で政府の出資によって設立された。「海外における日本研究に対する援助および斡旋ならびに日本語の普及」を目的に掲げ(国際交流基金法業務条項第23条)設立された。1983年の国際交流基金運営審議会答申では『アジアにおける日本語教育』で本名(2000:13)も指摘しているように「日本語の普及は基金法で定められた基金の大きな使命の一つで、その最終目標は現地において現地の人材により日本語を教える体制を作り上げることである」ということを明確に打ち出している。
 - 15) この表は国際交流基金の全世界規模の調査、国際交流基金ブダペスト事務所の調査、および筆者自身の調査結果をもとに作成した。
 - 16) 1999年12月以前からも開かれていたのであるが、残念ながら資料が残っていない。資料で確認できるのが1999年12月からの開催である。
 - 17) 国際交流基金ブダペスト事務所は、当初日本人は所長一人という体制であったが、2000年8月からは「日本語教育アドバイザー」という日本人専門家のポストが増設された。現在は国際交流基金の日本語教育アドバイザーが協力隊日本語教師はじめ長くハンガリーで教えている一般の日本語教師達の力になり、互いに協力しあって活動にあたるという理想的な派遣形態になっている。
 - 18) 日八・八日の辞書は前述の今岡のものがあるが日本語初級の高校生使用には適していない。また1999年には『日本語ハンガリー語辞典』⁶⁾、2000年には『ハンガリー語・日本語、日本語・ハンガリー語、経済用語辞典』が出版されているがこれも高価であったり、専門家を対象としたものであったりで高校生向きのものではない。
 - 19) 1989年5月に当時は手書きガリ版刷りだったハンガリー日本人会の機関紙「ドナウ通信」に下記のような記事が掲載されている。
「ブダペスト第4区、パピチ・ミーハイ・ギムナジウムからのお願い：今度、同ギムナジウム(生徒数約500名)より、同校に日本語専修クラスを創設する計画があり、同校において初歩的な日本語の教授(英語による教授で可)を行い、かつ本件クラスのカリキュラムの策定や、必要な日本語読本、教科書の選定等を指導していただける在ハンガリー邦人のボランティアを探しているとの協力要請がありました。この日本語クラスの出発を手助けいただけるような人材を探しています。もし本件にご関心、興味のある方は、大使館の寄保さんまでご連絡ください。」
 - 20) 協力隊隊員は原則として2年という任期で派遣されてくるが、最初の一ヶ月はホームステイをしながらの語学研修があり、配属先における実質の活動期間は延長をしない限り2年に満たない。
 - 21) 2002年日本留学のための文部科学省奨学金獲得者8名のうち7名がカーロリの学生である。

- 22) 1997年から2年間はシステム・エンジニアも派遣され、パソコンを使った日本語教育等を指導した。
- 23) 「パブリカ通信」の発行人、日本人ビジネスウーマンのSさんによると、在任中に突然亡くなったアントール (Antal) 首相を悼み街の至る所に黒い旗が掲げられていた時、ハンガリー語のニュースを解さない多くの日本人は、意味が分からなかった。この時、Sさんは簡単でいいからハンガリーのニュースを日本語で日本人たちに伝えようと、この「パブリカ通信」を始めたという。
- 24) ジェトロ・ブダペスト事務所より入手。2001年9月5日付、内部資料。
- 25) 「ハンガリー・ジャーナル」は元ジャーナリストのMさんが責任者として編集しているだけに、また、既に「パブリカ通信」が存在している中、それに加えて、という状況からも、量的・質的に内容の充実したものとなっている。
- 26) 国際交流基金1998年の統計数値をもとに算出した。2,102,103/(東欧15,085+西欧47,451=62,536)
- 27) Modern Languages: Learning, Teaching, Assessment. Common European Frame of Reference, Council for Cultural Co-operation, Strasbourg, 1998 (ヒダシ2000 : 120)

参考文献

- Economic Cooperation Bureau, Ministry of Foreign Affairs, *Japan's ODA Annual Report 1996* (1997) Tokyo
- Hajdu Jozsef (1997) 'Japanese Studies in Hungary' paper for the International Seminar at the Aichi Gakuin University, Nagoya, 11-12 July 1997
- Halasz Gabor (2001) 'The Development of the Hungarian Educational System' National Institute for Public Education, Budapest
- 羽仁協子 (1996) 『遠くからきた鏡』 雲母書房
- Hankiss Elemer (1990) *East European Alternatives* Clarendon Press, Oxford
- ヒダシ・ユディット (2000) 「ヨーロッパにおける日本語教育の展望」『ヨーロッパ日本語教育』第5号 第5回シンポジウム報告・発表論文集2000年、ヨーロッパ日本語教師会 120 - 121
- ヒダシ・ユディット (2002) 「ヨーロッパにおける日本語教育を考える」『多元性のある日本語教育教材研究及び作成 欧州広領域での使用を目指して』『無差』第9号2002年、京都外国語大学日本語学科 100 - 104
- 本名信行・岡本佐智子編 (2000) 『アジアにおける日本語教育』三修社
- 家田修 (1981) 「日本におけるツラニズム」『日本と東欧諸国の文化交流の関する基礎的研究』日本東欧関係研究会 207 - 209
- 今岡十一郎 (1935) 『ツラン民族運動とは何か』日本ツラン協会
- 今岡十一郎 (2001改訂新版) 『ハンガリー語辞典』大学書林
- Kiss Sandorne Szekely Ilona (1998) *Japan Nyelvetani Osszefoglalo* Tarogato Kiado Hungary
- 国際交流基金 (2000) 『海外の日本語教育の現状 = 日本語教育機関調査・1998年 = 』
- 近藤正憲 (1999) 「戦間期における日八文化交流の史的展開」千葉大学大学院社会文化科学研究科学学位論文
- 南塚信吾 「日本とハンガリーの文化交流 - A 日本 = ハンガリー文化交流の歴史と現状」(1982) 『日本と東欧諸国の文化交流の関する基礎的研究』日本東欧関係研究会 56 - 63
- 南塚信吾 (1998) 「ハンガリーにおける諸外国認識の史的展開」千葉大学大学院社会文化科学研究科学学位論文
- OECD Proceedngs (1999) *Towards Lifelong Learning in Hungary* OECD and European Com-

ハンガリーにおける日本語教育史概観

- mission PHARE Programme
- magyarorszagi Japan - kutatás történetéről és az
ELTE Szakáról Japan - kutatás Magyarországon
- Mult és Jelen, Budapest, Hungary
- Palmore, A. James & Robert W. Gardner (1994)
*Measuring Mortality, Fertility and Natural
Increase* Honolulu, East-West Center
- Sato Noriko (1996) "A Japan Nyelvoktatás
Története és Helyzete Magyarországon a
Nyelvkönyvek Tükreben" (328-335) *VI. Orszá-
gos Alkalmazott Nyelvészeti Konferencia:
Nyelvek és Nyelvoktatás a Kárpát-Medencében 2.*
1996. április 2-4 Nyíregyháza, Hungary
- 佐藤紀子 (2002) 「ブダペスト商科大学 (旧外国貿易
大学) におけるビジネス日本語検定試験」 『第14回
日本語教育連絡会議報告発表論文集』 2002, 3
- 徳永康元 (1965) 『ブダペストの古本屋』 恒文社
- 徳永康元 (1968) 『ブダペスト回想』 恒文社
- 戸谷浩 (1999) 「提督の白い馬・天皇の白馬 - 戦間
期の日本・ハンガリー関係史の一断章」 『明治学院
論叢第621号総合科学研究』 60 : 27 - 45
- Umemura Yuko (1997) "Egy fejezet a japan-mag-
yar szellemi kapcsolatok történetéből" *Szazadok*
Cimmet 43, *Evfolyam* 2000, 1. szám (82-90)
Budapest, Hungary
- Verdry, Katherine (1996) *What Was Socialism,
and What Comes Next?* Princeton University
Press, Princeton New Jersey
- ヴィダ・ヤーノッシュ (1982) 「日本とハンガリーの
文化交流 - A 日本 = ハンガリー文化交流の歴史
と現状 (1) 第一次大戦前」 『日本と東欧諸国の文
化交流の関する基礎的研究』 日本東欧関係研究会
64 - 78
- Vihar Judit (1999) "Miért tanul (ja) nek
gyerekeink japanul?" *Nyelv Info, A Nyelvtanárok
Lapja*, VII. *Evfolyam* 1999/4 szám
- 山路征典 (1999) 「ハンガリーへ来た頃のこと」 『ド
ノウ通信』 No.40 : 17 - 22
- Yamaji Masanori (1996) *Bevezetoul roviden a*